

報告

声を上げる女性はなぜ、叩かれるのか？—女性たちへのエール

三浦 まり
モナ・ショレ

概要

モナ・ショレさんはフランス人の高名なジャーナリストで、とりわけ2018年にフランスで出版された『魔女——女性たちの不屈の力』は大きな反響を呼び、2022年11月に日本語の翻訳書も刊行されました。これを機に来日されたショレさんをグローバル・コンサーン研究所でもお呼びし、講演会と私との対談を企画していましたが、事情により急遽帰国されることになり、イベントは残念ながら中止となりました。ここに収めた原稿は、ショレさんが準備をされていた講演原稿の抄訳となります。

中世の魔女狩りが実に多くの女性を虐殺したものであることは日本でもよく知られていますが、魔女は決して過去の妄想ではなく、現代の女性たちもまた魔女として蔑まれていることをショレさんは鋭く突きます。魔女というのは、男性たちの支配から逃れた女性たちのメタファーであり、男性にとって価値のない女性を貶める言葉です。魔女と呼ばれることを女性たちに怯えさせることで、女性たちをコントロールしようとする意図が働いているのです。

中世においてこのような魔女幻想が猛威をふるった背景には、世俗権力と宗教権力がそれぞれで女性たちだけで担っていた出産を男性が管理するものへと変容させたいという意図があったことを、数々の研究書を引ながらショレさんも指摘します。現在の日本でも少子化が国難として受け止められ、異次元の少子化対策なるものが政府から打ち出されようとしているとき、魔女狩りは異国の過去の話と片付けるわけにはいかないことに気付かされます。女性たちになんとしても子どもを産ませたいと望む権力者は、子どもを産まない女性には価値がないと信じ込ませるためのさまざまな言説を作りだすかもしれないのです。

現代版の魔女狩りは注意深く観察すれば、至る所で発見できるものです。2001年のことですが、石原慎太郎都知事（当時）の「女性が生殖能力を失っても生きているのは無駄で罪です」という発言が週刊誌に載り、「石原都知事の『ババア発言』に怒り、謝罪を求める会」が活動をしたり、女性たちが損害賠償を求める訴訟を起こしたりしました。裁判は原告敗訴に終わり、発言も撤回されていません。この発言自体は20年以上も前のことですが、女性は「産む機械」だとか、高齢女性はお荷物だとか考える人は今もまだ社会に一定数存在しているのではないのでしょうか。

さら現在では、卵子凍結の利用が推奨される風潮も強まっており、子どもを産まないことを積極的に選択する女性が一層肩身の狭い思いをするのではと懸念されます。

ショレさんは西洋社会のさまざまな事例を引ながら、現代版の魔女狩りに警鐘を鳴らし、女性の価値を貶める社会の眼差しに抵抗することを説きます。彼女自身が白髪を染めないのも、若さ（＝性的魅力、生殖可能性）に価値を置く社会に異議を唱える彼女の政治的な行為なのです。

魔女のメタファーは排斥の対象であると同時に、強さの象徴でもあります。女性たちが持つ

魔力に男性たちが怯え、その力を剥奪しようとしたのが魔女狩りであるなら、女性たちは自分たちの力と価値に目覚め、奪われたものを取り戻すべきだし、取り戻すことができることをショレさんは訴えています。

「不屈の反逆者」たれと説くショレさんの言葉に勇気をもたらす女性が多いはずで、次回の訪日機会に期待しましょう。

三浦 まり（みうら まり）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学法学部）

モナ・ショレさん講演原稿(抄訳)「魔女——女性たちの不屈の力」

はじめに、私がどのような本を書いている、どのように仕事をしているのかについて、簡単に説明したいと思います。私はジャーナリストなので、専門家のような学問的な考察をしているわけではありません。私のエッセイは、私の人生のある時点で思ったことや経験したことと直結する問題意識が出发点となっています。疑問を解決するためや、自分自身の気持ちをすっきりさせるために、掘り下げたいと思うテーマを取り上げています。歴史書、社会学の文献、哲学書、小説、証言、ドキュメンタリー、テレビドラマ、映画、友達の話など、様々な情報源を活用しています。

私がフェミニストになったのは、ある意味偶然のような気がします。つまり、女性が人生の悩みについて書く場合、必然的にフェミニスト的な分析に行きつくのです。フェミニズムに関する私の知識は断片的で、網羅的でもなければ体系的でもなく、問題を熟知しているという立場からではありません。

この『魔女——女性たちの不屈の力』という本については、当初は書きたいテーマがいくつかありましたが、どれにするか決めかねていました。最初に、女性が齢を取ることのマイナスイメージについて書こうと思いました。年老いていくということに男女差はないものの、圧倒的に女性の方が年齢について辱めを受けています。数年前に、女性にのしかかる美しさの基準について本を出しましたが、その時は加齢については触れませんでした。2017年の始め頃で、私は44歳。「若い女性」が持つ特権を失いつつあり、自分のこととして意識し始めていましたが、話題にするフランス人フェミニストはあまりいませんでした。

他にも書きたいテーマがありました。子供を作らないという選択についてです。私自身がそうでした。子供の頃から、母親にはなりたくないと思っていました。子供が欲しいということが普遍的な願望であるとされる社会では、このような考えを押し通すのは並大抵のことではありません。

こうして、二つのテーマのあいだで迷っていました。心を決めかねていたある日、この二つのタイプの女性、即ち齢を取っていく女性と子供が欲しくない女性が、両方とも「魔女」であることに気付いたのです。ヨーロッパにおける主に16世紀と17世紀の魔女狩りの歴史に関する文献を読み始めました。そして、魔女狩りで断罪された人々は、やはり高齢女性が突出して多かったということがわかりました。とりわけ高齢女性が蔑まれていたのは、「役に立たなくなった」から、つまり子供を作ることでもできず、前みたいに働くこともできず、そのうえ目の保養にもならない存在だったからです。

また、歴史書を読んでいくうちに、魔女狩りが子供を作らないということと関連しているということがわかりました。当時、政治権力と宗教権力は、出生数を憂慮し、女性の出産をコントロールしようとしていました。サバト迷信がそれを物語っています。ジュール・ミシュレは、著書『魔女』のなかで、サバトと称される、悪魔の崇拜者たちによる夜宴は、不妊祭、即ち女性が決して妊娠することがない乱交パーティだと考えられていた、と述べています。サバトが、権力を握る男たちが抱えている恐れを反映していること、また、彼らこそがこの迷信を創り上げたことを思えば、民衆の反乱が彼らの心の中でこのような形で表されていることがよくわかります。これと関連して、魔女には、子供を殺したり、子供を使って魔法の水薬を作ったりするというイメージが付き纏っています。

魔女狩りは出産や墮胎の手助けをする女性治療師たちを服従させるという側面もありました。「魔女」と断じられた彼女たちは、母子と密室にいることを利用して赤ちゃんが洗礼を受ける前に悪魔に捧げているのではないかと疑われていました。出産の現場には女性しかいないということの虞（おそれ）を物語る妄想です。女性治療師たちは排除され、出産という決定的な瞬間の支配権は、男性である正規の医師の手に渡りました。今日においてもなお、西洋医学における女性蔑視は根深く、フランスではここ数年、女性が出産の際に医療従事者から受けた暴力や、医療システム全体の中での暴力について、夥しい証言が出始めています。

文献を通じて、勘が正しかったことがわかったのと同時に、魔女に擬えられている女性の類型がもう一つあることがわかりました。それは自立した独身女性です。独り身の女性や寡婦、つまり男性の支配下にはいないすべての女性が、魔女狩りの恰好の標的になっていたことがわかったのです。今日、独り暮らしの女性を蔑んで指す言葉として「猫と暮らす独身」とよく言われますが、これは、意識せずとも、猫を伴う魔女のイメージがそのまま受け継がれているということではないでしょうか。その猫も悪魔の化身とされており、往々にして黒い猫として描かれています。

こうして、今日では私たちは意識していませんが、魔女狩りがいかに西洋における女性観を形作っていったかについて、本を書くことにしました。中世のヨーロッパ人女性は、後世と比べるとかなり自由でした。鍛冶屋、麦酒職人、肉屋、パン屋、商売人など、あらゆる職業に就くことができました。それがルネサンスの頃に、法的地位が大きく後退しました。そして19世紀になると、子育てに専念する、そしてその役割が性に合っているとされる、主婦が出現します。

私の仮説は、魔女狩りによって女性に関する先入観や偏見が再生産および拡大されて、受容され称賛される女性像と、社会的に断罪され憎まれる女性像という両極端な類型化に繋がった、というものです。魔女狩りには秩序維持の効果もありました。魔女の嫌疑をかけられた女性たちの公開処刑は、他の女性に対して、へりくだって目立たないようにした方が身のためだと言い聞かせる効果がありました。

私以前にも、魔女狩りをフェミニスト的視点から考察した人々がいます。既に19世紀において、奴隷制度の撲滅運動を行っていたアメリカの女流作家、マティルダ・ジョスリン・ゲージが、魔女裁判の女性蔑視的側面を指摘する本を書いています。後に、1968年に、アメリカ人フェミニストたちによってWITCH、即ち「Women's International Terrorist Conspiracy from Hell」

という団体が立ち上げられました。1970年代には、イタリア人フェミニストたちがデモで「慄くがいい、魔女たちの復活だ!」と唱えていました。フランスにおいても、女流作家のグザヴィエール・ゴティエが「Sorcières (魔女)」と名付けた新聞を発行し、マルグリット・デュラス、エレヌ・スィクスー、ナンシー・ユーストンなどの女流作家が参加しました。

これらのフェミニスト的視点からの魔女狩り考察は、たいてい、小ばかにされています。多くの評者が「客観的な歴史家が行なった真面目な研究を歪めるような、行き過ぎた、ヒステリックで非合理的な解釈だ」とみなしています。しかし、このテーマに関する文献を読むと、非合理的なのは往々にしてむしろ歴史家の方ではないかとの印象を受けるのです。そもそも、長いあいだ、魔女狩りは脚注で触れられるだけという程度の扱いでした。後に、本題として扱われるようになると、哀れな女、気狂い女、白痴などと形容された犠牲者に対する侮蔑をもって扱われました。そして、犠牲者に対する同情が見られるような場合においても、歴史家は自らの研究を矮小化することに努め、即ち当時のヨーロッパ社会の凄まじい女性蔑視をつぶさに描写しつつも、「だからといって魔女狩りが女性蔑視に由来すると言えるのか。否、全くそうではない」と結論付けるのです。

根深い女性蔑視を物語る事象であるからこそ、著しく不都合であり、矮小化しようとしているのです。それに、魔女狩りの時代は啓蒙思想の時代でもありました。気狂いじみた理由によってこれほどまでに多くの男女が火あぶりにされたことが、より合理主義的で、暴力を排し、民度の高い社会への進歩の時代とされる時代の歴史像にそぐわないのです。それもそのはず、魔女狩りがルネサンス期ではなく、暗黒で野蛮な時代というイメージがある中世に行なわれていたと多くの人々が思っています。私自身、この本を書くために様々な文献を調べるまではそう思っていました。つまり魔女狩りは、ヨーロッパ人が自身の歴史を語る際の問題を表していると言えるのであり、この問題は、もっと掘り下げられてしかるべきなのです。

モナ・ショレ (Mona Chollet)
(翻訳 在日フランス大使館)

フランスのベストセラー『魔女—女性たちの不屈の力』の著者モナ・ショレが届ける

声をあげる 女性 はなぜ、叩かれるのか?



Sorcières
La puissance invaincue des femmes

女性たちへのエール

<p>日時: 2022年11月10日(木) 18:00~19:30 (開場: 17:30)</p> <p>会場: 上智大学四谷キャンパス 2号館17階1702 国際会議室</p> <p>形式: 対面方式 (参加費: 無料)</p> <p>言語: 仏日同時通訳付き</p> <p>対象: どなたでも参加ください</p> <p>定員: 100名 (先着順、申し込み不要)</p>	<p>〈タイムテーブル〉</p> <p>18:00~ オープニング</p> <p>18:05~ モナ・ショレさん講演</p> <p>18:50~ モデレーター・三浦まり教授と対談</p> <p>19:20~ 質疑応答・クロージング</p>
---	---

講演者: モナ・ショレ Mona Chollet

1973年、スイスのジュネーブに生まれるジャーナリスト、エッセイスト。ショレが文学部で学んだとき、フランスのフェミニズム運動が盛んな時期で、専門学校の学生組織、フェミニズム、マスメディア、現代の社会的・政治的イメージに関する著作多数。

モデレーター: 三浦まり Mari Miura

上智大学法政学教授、グローバル・コンサーン研究開発所所長

モナ・ショレ氏は、ヨーロッパのフェミニズムの議論に大きな影響力を持つ気鋭のジャーナリスト、エッセイスト。フランスでベストセラーとなった『魔女—女性たちの不屈の力』の日本語訳版の刊行を機に在日フランス大使館の招きで来日する。ショレ氏は、中世を原典とした『魔女狩り』の歴史を振り返り、「目につく女性」が迫害される事実が隠蔽されていたことを読み解き、「女性蔑視」という現代社会の災厄に抗議する。

日本の政治分野に「パリティ」(男女同数)の概念を広め、ジェンダー平等と女性のリーダーシップについて、社会的議論を牽引してきた上智大学の**三浦まり**教授が、女性の今と展望を中心に、ショレ氏と対談。



●『魔女—女性たちの不屈の力』
講義別付会 2022年10月下旬刊行

【主催】上智大学グローバル・コンサーン研究所【問い合わせ】iglooon@sophia.ac.jp【協力】在日フランス大使館/アンスタティファランセ七日本、アンスタティファランセの/日本部
